

2009年8月30日 講義3

講義タイトル: Ethno biological study of medicinal plants in the Dja biosphere reserve in Cameroon

講師: Dr. Jean L. Betti

キーワード: ethnobotany, medical plants, forest as a local pharmacy, vulnerability, treatment of ailments

要約

講師の Betti 博士は 1994 年からカメルーン南部の Dja Biosphere Reserve において、地元の人々がどのように薬草 (medical plants) を利用しているかを研究している。Dja Reserve はギニア - コンゴ熱帯雨林地域に位置し、動物・植物の多様性が豊かである。Dja Reserve に暮らす人々は、森の資源を生活にさまざまな形で利用している。薬草の利用は経済危機が深刻化し、FCFA の切り下げがおこなわれた 1980 年代から人々の間で盛んになった。十分な衛生システムを持たない住民にとって、森林及びそこから薬草は「森の薬局」として重要な役割を果たしている。しかしながら、薬草の利用と植物資源の脆弱性に関する研究はこれまで十分になされてこなかった。Betti 博士は、民俗植物学的視点からこの問題に取り組んできた。その結果、異なるエスニック・グループ間でも同じように植物が病気の治療に使われていることが明らかとなった。Betti 博士は分析に統計学的手法を用い、エスニック・グループと居住地域が薬草の利用法の類似性に重要な影響を与えていることを明らかにした。特にエスニック・グループについては、薬草の利用法に従って 3 つの区分ができるとする。すなわち、1. バカ・ピグミー、2. ベティ・グループ (Bulu, Fang, Nzaman)、3. Co-zime グループ (Badjoué, Kaka, Zimé) である。いずれの人々の場合にも、彼らの薬草の利用法は薬学的にも正しいことが証明されている。将来の課題は以下の三点である。第一に毒性のある植物の利用を避けるために標準化された処方箋を人々に用意すること、第二に誤った植物採集を避け、彼らの薬草の利用を確かなものとするために、薬草についての知識を身につけさせること、そして第三に、薬草を枯渇させないために植物体の一部(葉など)を使わせることである。

(報告者 牛久晴香)